女 醫 の 話

私達の話題が、いつか妊娠といふことの上に渡つて行つた時に、そのうちの一人の、女醫のA氏は、黒い袴の紐に絡んだ鎖を手繰つて、巧みな手付きで時間を見ながら（例の左で）次のやうなことを話し出した――。

女を診察するには、どんな場合にでも妊娠と云ふことを頭に置いてかゝらなければいけない――とはよく私達が生徒時代に教しへられた言葉でした。誰もまさかと思ふ、そのまさか、時々背負ひ投げを喰はせますからね。處女でございますなんて、口先きの例證を信じる程醫者はお人好しぢやないんですよ、。實驗がだん／＼お人好しぢやなくなしてしまふんですもの。まさかの裏切り初めは、まだ私が學校に居ました時分です。或日のクリニックに、寄宿舎に出入りをして居る洗濯婆さんの娘が――一寸綺麗な顔をしてましたよ――ごつかのお邸に奉公をしてるとかいひましたが、乳が腫れたといつてお婆さんが非常に心配をして診て頂きたいと云ふんです。丁度S先生のクリニックの時でした。先生は

さすがに躊躇して居る娘をさし招いて、お婆さんが脇からく／＼容態を云ふのをフム／＼聞いてましたつけ、ふと口髭のあたりに輕るい微笑が泛んだと思ふと、周囲をふりかへつて Schwanger Schaff 一つていふんです。ぐるりの眼といふ眼はみんな見合して、みんな意外といふやうな顔をしました。獨逸語で妊娠といふことだったので。お婆さんはそんなことは知るよしもありませんから、さも心配さうに先生に聞いて居ます。先生つたらまた意地悪るさうににや／＼しながら、なアにお母さん、ちつとも心配することはないよ。薬も何も要らない、濕布でもして置きあ瘉つちあつて云ふんでせう。ぐるりの低いところから高いところから、たくさんな女の眼が自分一人に注いでるので、それもきつと或る憎悪と蔑みとが感じられたのでせう。――A氏は茲に嫉妬といふ言葉を入れるのを忘れた――娘はやがて耳を赤くしてしく／＼と泣き出しました。するとお婆さんはまた、娘の背中を撫でないばかりに、此娘は昔から氣が弱いものですから……なんだか氣の毒になりましてね、笑ふには笑はれず、つく／＼娘の顔が見られましたよ。まあ十八ばかりの何にも知らないやうな顔をしてましたつけのに。

それから私が實地の試験準備の爲めにW先生の醫局に居た時のことです。或晩患者の家からW先生を迎へに來ました。生憎先生は往診に出て居て不在でしたから、さう言つてか

へしてやると、追付けまた使ひが来て、何誰でもない、から来て呉れと云ふのです。其晩醫局には私と同期生のHさんだけでしたが、Hさんの都合も悪くて私が行くことになりました。患者と云ふのは或る軍人の未亡人で、相當な地位にあつた人でした。いづれ婦人科の方には違ひありませんが、その滓りもの、中に小さな塊りがあるんです、それがどうでも何だか判断がつかなくつたので、懐紙に包んで持ちかへりました。やがてお歸りになつた先生に見せると、どうでせう、それは流産だつたのです。あの時はW先生もお驚きなさいましたよ、まさかと思つてたのにねえつて。——私も成程と思ひましたね、女を診察するには如何な場合にでも妊娠といふことを念頭に置かなければいけない——こんなことを言つたら純潔な貴女方は侮辱されるやうにお思ひでせうけれど、私はもう女に依つて女を侮辱されるに馴れました。聽診器を握つたら病源を知つて、適當な藥を調合すれば私の任務は了るのですからね、患者の境遇を付度したり、一々如何はしい病氣に腹を立てるやうな馬鹿はしません。それでも青い顔をして肩で息をしながら、産褥に居るうちに夫と別れたのだから、妊娠する筈はありませんなど、言はれると、だつてもそれ、現在お腹の中にビク／＼動いてるぢやありませんか！と少しは強く言ひたくなりますね。え、そんなのが一度來ましたよ、自分ぢや脹滿のつもりで居たらしいんです。さう／＼、是は學生時代

にS先生が話したことでしたが、某官吏の夫人がお産をして、一週間目に夫は臺灣に赴任したそうです、すると夫人の肥立がよくなつて來ると同時に、だん／＼お腹が大きくなつて來たので、親戚の者が氣付いて大騒ぎをやつた揚句、事の次第を報じてやると、間もなく夫からは『心配するな』といふ電報が來たさうです。此話を聞いた時分には、私も奇蹟を聞くやうな氣がしましたつけ、自然といふものは時々皮肉な惡戯をやるものですよ。云々

私はたゞA氏の話をのべたゞけにさめよう。これらの話に徒らに眉を顰める人と、或る憐さを汲み得る人とは、その各々の境遇に伴ふ心持ちに依つて別れるであらうと思ふか

完

水野 仙子